

食品トレーサビリティシステム標準化推進協議会 相互運用研究部会

平成16年度活動報告書

平成17年 5月 31日

食品トレーサビリティシステム標準化推進協議会
相互運用研究部会

目次

FTSSI

1. はじめに	3
2. 相互運用研究部会について	4
3. 活動報告	6
4. 実績報告	10
5. 活動のまとめ	17

食品トレーサビリティシステム標準化推進協議会

会長 松田 友義 千葉大学大学院
副会長 田上 隆一 農業情報学会

相互運用研究部会 取り纏め作業委員会

委員長 谷 和夫 セイコーインスツル株式会社
委員 福田 互 株式会社三菱総合研究所
鈴木 英寿 株式会社日本アイ・ビー・エム
野崎 陽志 日立ソフトウェアリング株式会社
渡部 浩幸 東日本電信電話株式会社
江原 正規 東京工科大学
河合 幹裕 FTSSI事務局

1.はじめに

FTSSI

相互運用研究部会 部会長 谷 和夫
取り纏め担当者 野崎陽志

食品トレーサビリティシステム標準化推進協議会 相互運用研究部会における平成16年度の主な活動内容として、定例会合を開催し、その中で各社/団体における食品トレーサビリティにおける取組事例、またそれに付随するコアテクノロジーについて講演を実施した。

講演後、それらのテーマに従い、食品トレーサビリティにおけるメリットや課題等についてメンバー間でディスカッションを行うことにより、それらを顕在化し、メリットを前面に押し出した推進、課題への解決方法等について、様々な有益な意見が抽出されている。

本報告は、食品トレーサビリティの相互運用についての講演内容とそれに対するメンバー間で抽出された様々な意見をまとめたものであり、これをもって平成16年度の活動結果成果報告とするものである。

松田先生、田上先生をはじめ相互運用研究部会員、協議会員の皆様のご協力に感謝致します。

2. 相互運用研究部会について

(1) 目的

背景

現在、トレーサビリティシステムにおいては、各企業内での独自の取組み、実証試験の実施及び行政の支援等により、食品業界検討及び導入の動きが見受けられる状況にあります。また同時にメディアによる報道も盛んなことから、そのキーワードは一般にも知られ、今後さらに期待されてくるステージにあると言えます。

目的

本協議会において、その規約()の目的に示される以下の事により、より具体的な活動を進める場として「相互運用研究部会」を設立。

「現在、数多く開発されているシステム間でのデータの共用等、標準化が必要な部分について、どのような形で標準化するか等について検討し、トレーサビリティシステムの導入を目指す利用者の混乱を回避するとともに、社会的インフラとしてのトレーサビリティシステムの普及を支援する」

活動の指針

横断型思考にもとづく調査及び研究活動を進めることで、相互運用性あるシステム化に繋がるアウトプットを目指す。

平成16年度「相互運用研究部会」活動方針

1. トレーサビリティシステム利用の拡大に寄与する手段として、まず最初に標準化のキーになる「コード」に焦点を当て協議を進める。
2. 部会活動を介し、情報交換及び会員相互の親睦を深めることに積極的に関与する。

2. 相互運用研究部会について

(2) 実績

活動実績

1) 定例会合6回

- ・各社/団体の取組事例発表講演 ex. 20件事例
- ・講演に関わる意見交換
- ・懇親会の開催

2) 相互運用研究部会、作業部会

- ・発表講演内容のまとめ ex. アンケート実施
- ・発表内容における意見交換
- ・平成16年度活動成果のまとめ作業
まとめ

まとめ

- ・現行システムの動向、運用状況、現場の声の把握が行えた。
- ・多義に渡る本システムの構成する要素技術動向についての理解が深まった。
- ・各システムにて扱われている「コード」の内容、及び利用状況が確認出来た。
- ・定例会合において、活発な意見交換と円滑なコミュニケーションの場が図られた。

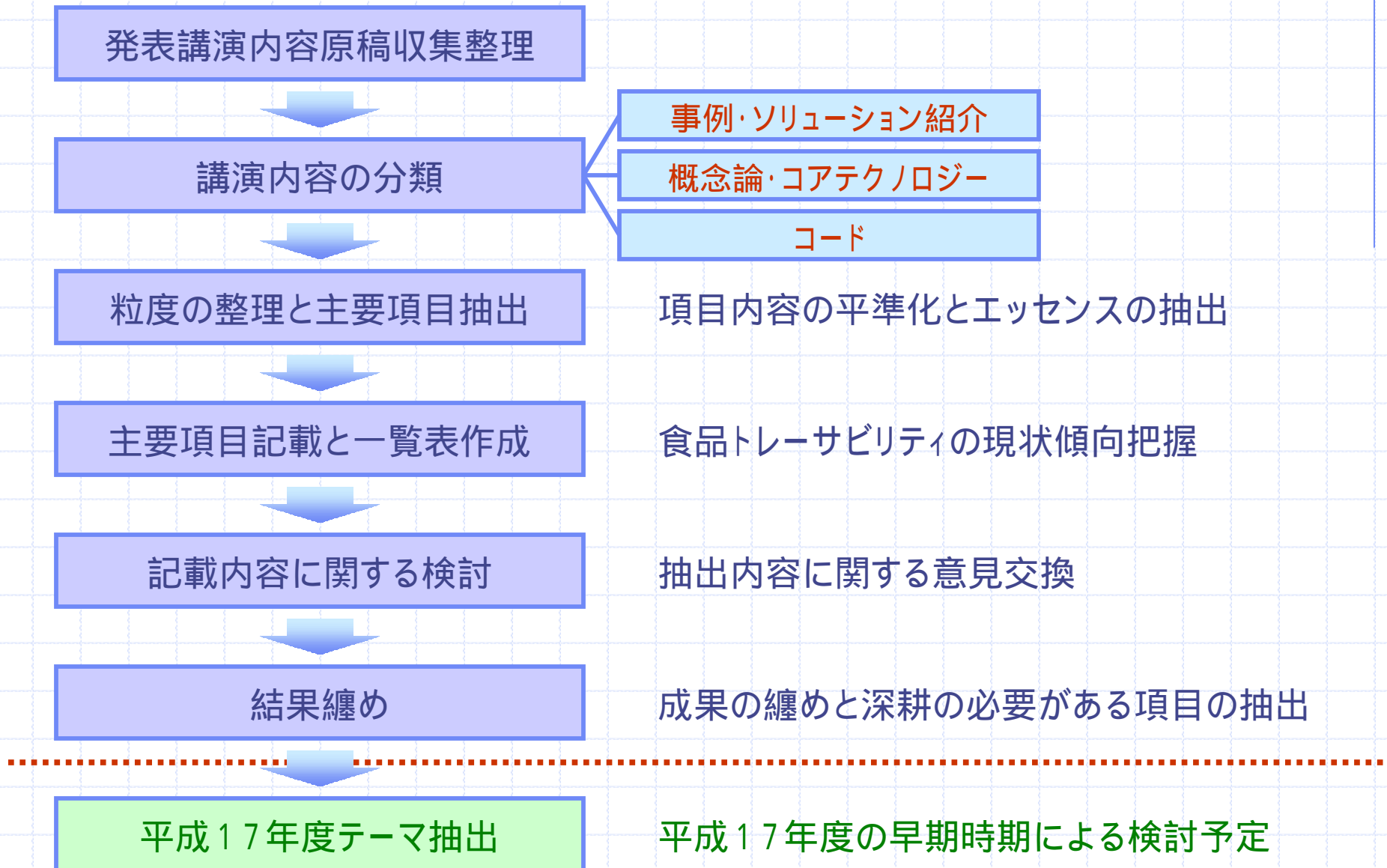
3. 活動報告 (1) 平成16年度活動内容

FTSSI

phase	Period	activity	details
1	H16/8 ~ H17/1	食品トレーサビリティ に関する現状把握	各社/団体の取組事例発表講演 発表講演: 20事例 講演内容におけるディスカッション その他意見交換
2	H17/1 ~ H17/5	発表講演内容と意見 の纏めカテゴリ化	発表講演内容の纏め 発表内容における意見交換 H16年度活動成果の纏め

(2)平成16年度活動成果の纏め

FTSSI



(3) 事例アンケートの実施 - 事例報告の整理 -

FTSSI

食品トレーサビリティ に関する現状把握

横断型思考にもとづく調査及び研究活動を進めることで、相互運用性のあるシステムに繋がるアウトプットをめざす。

これにより食品の特性及び市場の特徴を生かした横断的且つ適正なシステム、更には新しいビジネスモデルの創出も期待できるのでは？

調査対象: 定例会議における事例報告 20事例

本協議会セミナーで講演を行った部員的事例 2事例 合計: 22事例

事例数 : そのうち、回答のあった13事例についてまとめの整理を行った。

既存システム・持続性を考慮した適切なシステムの構築には、現状の把握が重要なポイントになると考え、現状の整理を行うために会員による事例報告を実施。

さらに、これまでの取組をまとめ、問題点の明確化、解決方法へステップアップを図るために、報告内容の整理を行った。

- * 実際の食品トレーサビリティの現状とそれに付随するシステムアーキテクチャ、コード体系の把握を主眼にまとめの整理を実施。
- * その結果、実際のシステム運用についての現場の生の声を聞くことができた。またそれを下支えする技術動向についての把握ができた。

(4) 講演内容の平準化とエッセンス(項目)の抽出

FTSSI

事例・ソリューション紹介に関する纏め

適応範囲	適応ステージ
	対象製品
	流通範囲
コードと媒体	コード種別
	利用コード
	選択理由
	利用媒体
システム概要	システム概要
	実験/運用
	運用事業者主体
	運用利用者
評価	運用結果
	トレーサビリティ運用評価(良い点)
	トレーサビリティ運用評価(悪い点)
	トレーサビリティの課題 課題に対する解決策
その他	利用ソフトウェア
	費用規模
	費用調達
	講演発表の主旨

概念論・コアテクノロジー

概念/技術区分
適応ステージ
対象商品
キーワード(要素)
概要
講演発表の主旨
トレーサビリティとの関係
優位点
課題等
実運用事例
運用事業主体
備考

コード

フリーフォーマットにて記載

適応範囲(適応ステージ)

ステージ	件数
生産	2
生産-加工	2
加工	1
物流	1
生産-加工-物流-販売	7

流通範囲

流通範囲	件数
国内生産-国内消費	10
工場(自社)内物流	2
国内生産-海外消費	1

適応範囲(対象商品)

対象商品	件数
青果	4
食肉	1
加工食品	4
医療材料	1
生乳・飲料	2
果樹	1

生産～販売までの実施実績傾向がある
 青果、加工食品関係のが多い
 国内生産-国内消費が多く、海外製品の
 輸出入に関する実績が少ない

コードに関して 重複を含む

商品コード	JANコード(6件)、独自(5件)
物流コード	UCC/EAN-128(3件)、独自(7件)

- 独自コードが多数
内部管理のため独自コードを利用

シンボルに関して

1次元バー	EAN13, UCC/EAN-128
2次元バー	QR, RSS
RFID	詳細明記なし

- 相互運用から見ると
商品コード: JAN
物流コード: EAN-128
- 相互運用において
クライアントによる要望は少ない
(内部管理では既存のものを利用)

媒体に関して 重複を含む

ラベルシール	10件
直接印字	2件
タグ	1件
未定、なし	2件

システム概要

システム概要
農産物生産段階における生産履歴と(承認プロセス)管理、情報配信を目的としたシステム
生産現場の設備情報(温度や噴水量等)の自動収集を行うシステム
工場(自社)内のトレーサビリティを実現。製品と設備情報をリンクするシステム
SCMと連動した情報運用を実現するシステム
加工製品のトレーサビリティを実現するコンサルティングを担当

実験/運用

実験/運用	件数
実運用	10
コンサルティング	3
実験	0

生産段階の情報登録から発信までの
 システムの実績が多数存在する
 SCMとして情報流通可能なシステムの実績がある
 実験のみのシステムはなく、実運用レベルに耐えられるシステムの実績がある
 導入時期はH15年、H16年が多い

運用事業者主体と運用利用者

運用事業者	運用利用者
JA・生産者	営農指導員・生産者
加工食品会社	工場長・工場従業員
医療機器・材料	医療メーカー・卸業者
自治体	自治体職員・生産者

青果の場合、JAの職員及び生産者がシステムの運用を行うデータのエン트리(トレーサビリティの基本となる営農日誌)は生産者が行う
加工品の場合はシステムの運用が工場内となるため、工場作業従事者となる

意見として、
データのエン 트리には非常に工数(手間)が必要となるが、

- ・ トレーサビリティシステムの運用により、製品の付加価値が上昇し、それが価格に反映されることが現実として可能である。
- ・ 加工食品の場合、トレーサビリティシステムの運用 = 品質の確保やコストの面で効果があり、それこそが会社を守る・・という意識がある。

という思いをデータエン 트리者が持つ場合には、積極的にデータのエン 트리を行う。

トレーサビリティ運用評価(良い点)

良い点
話題性・周囲の好感度アップ
データエントリがしやすく、業務が円滑に
在庫管理システムとして役立つ
情報が何時でも取り出せる
作業履歴、作業管理もあわせて管理できる
問題が生じた場合、被害を最小限に押さえる
製品破棄リスクの軽減ができた
商品の付加価値が向上し、小売価格がアップした



イメージアップ
究極は製品の付加価値アップ
品質確保とコスト低減

トレーサビリティ運用評価(悪い点)

悪い点
情報入力が面倒(利用者のIT成熟度が低い等)
(意見)FAX OCRの利用等で入力工数を軽減
(意見)入力画面の簡便化が必要
(意見)入力者の意識改革が必要
(意見)情報の可能な限りの自動収集が必要
複数社間の意識の統合が難しい
導入・運用コストに見合わない
導入・運用に見合う成果が不明である
内部情報を出したくない
データ通信のインフラが未整備



データエントリが面倒
工夫(簡便化、意識向上)が必要
コストに見合う成果がみえない

トレーサビリティの課題

課題
農業マスタ情報(商品/農薬等)のコード化の統一
現場の利用者に如何に負担無く運用できるか
CODEX、ISO22519対応
事故等対策ではなく、有効な安心安全を提供方法
トレーサビリティに参加する関係者の意識向上
運用面での効率化と可視化
販売面での遡及チャネルを増やす
構築コストを消費者にも転化 商品付加価値向上

統一されたコードがない
 利用者の負担(コスト/作業負担)が大きい
 関係者の意識向上策が必要

課題に対する解決策

解決策
各種関係組織体との協同によるコードの統一化
現場作業者の入力負担を無くす仕組みを提供
メリットアピールによる関係者意識改善・普及促進
消費者への関心向上策の実施
SEICAとの連携を視野に入れたシステム運用
システム構築・運用コストの低減
主要業者による協議会の設立

コードの統一化
 作業負担軽減のための施策を提供
 ハンディターミナル、UIの向上・
 システム構築・運用コストの低減

講演発表の主旨

課題

- コード、プロトコル、運用ルールが不統一。システム化が大変であり、早急に相互運用に関する取り決めをすべき。
- トレーサビリティをブームで終わらせるのではなく、各社・各団体が力を結集して、統一基盤を作りたい。
- トレーサビリティとは特別なことではなく、品質を確保するためには当たり前の仕組みである。
- 飲料業界で液体の様に個体管理がし難い製品についてもコードの標準化を検討したい。
- 現場のパートさんの負担を軽減するという発想から自社技術でシステムを構築したという思いを知って欲しい。
- トレーサビリティシステムの拡大・普及の可能性・課題について共有化を図りたい。
- 生産～小売までをカバーした体制と規模の大きい実運用モデルとしてとの意味を鑑み、発表課題を選定。
- トレーサビリティは単体でのニーズが低く、SCMと連携して構築されて意味があることを現実として認識して欲しい。

H16年度の纏め

有益な情報の提示と享受により、食品トレーサビリティに関するメリット、課題を共有することができた。
それに関する積極的なディスカッションができた。
情報の共有、メリット・課題の認識までに留まり、相互運用における具体的なアイデアの纏めまでは到達できなかった。

H17年度の活動指針

相互運用を進める上での具体的なアイデア(意見)の抽出
H16年度の討議内容にかけている業種・業界の知見者の
招集と意見収集



食品トレーサビリティシステム標準化推進協議会



- ◆ 設 立：平成15年3月16日 準備会の発足
平成15年6月13日 現団体名にて正式設立
- ◆ 役 員：会長 千葉大学大学院自然科学研究科 教授 松田友義
副会長兼事務局長 農業情報学会 副会長兼専務理事 田上隆一
他幹事 13名
- ◆ 会員数：59会員（平成17年5月現在 個人会員も含む）
- ◆ 運 営：本協議会は、消費者のための「安全」「安心」の食品産業形成に関心を持つ企業・団体等によって構成し、構成員の総意に基づいて事業運営します。構成員は自由な立場で議論し、協議会活動は農水産業界、食品産業界ならびに社会に幅広く公開することを原則とします。
- ◆ 主な取組：セミナー開催、会員内の勉強会・情報交換、トレーサビリティシステムにおける相互運用の調査・研究、シス・トレ協への参加など

お問い合わせ：事務局 TEL 029-856-1201
E-mail : office@trace-sys.jp
URL : <http://trace-sys.jp>